岐阜経済大学論集 35 巻 2 号（2001 年）

日本人の「待ち心」今昔（9）

武井勇四郎

序
第一章　「垣間見」の日本的風土　……（以上，第 33 巻第 2 号）
第二章　日本人の「待ち心」の原風景　……（以上，第 33 巻第 3 号）
第三章　『枕草子』の待つものの品々と
　　斎藤徳元の『尤之双紙』　……（以上，第 33 巻第 4 号）
第四章　「待つ間」の美意識――兼好法師　……（以上，第 34 巻第 1 号）
第五章　今も昔も変わらぬ「来迎待ち」　……（以上，第 34 巻第 2 号）
第六章　出逢い待ちと垣間見の展観美　……（以上，第 34 巻第 3 号）
第七章　閑話―「待つ間」さまざま――休題　……（以上，第 34 巻第 4 号）
第八章　情念の「待ち心」と夢幻能　……（以上，前号）
第九章　一人当千の「待ち伏せ」と敵討ち
　一節　「女時」の待ち伏せ――ヤマトタケルの女装
　二節　十七年待って親の敵討ち――『曾我物語』
　　……（以上，本号）
　三節　「夫婦時」の敵討ち――『あきみち』
　四節　「男時」の待ち伏せ――忠臣蔵事件と「仮名手本忠臣蔵」

第九章　一人当千（いちにんとうぜん）の「待ち伏せ」と敵討ち

一節　「女時」の待ち伏せ――ヤマトタケルの女装

「女時（めとき）」「男時（おとき）」は，『風姿花伝』の「時の間にも，男時・女時とてあるべし」（小学館旧版 p. 293）の転用による。歌舞伎の役柄に女形，和事や荒事があるように，「待ち伏せ」にも受けの女装的なそれと，攻めの

猛々しい集団的な武装的なそれとがある。その中間に夫妻ともに敵討ちする「夫婦時（めおとき）」のそれがある。

日本の昔話には親の敵討ちの話が多い。日本人は幼児期からそうした絵本をたしなみ，大人になると忠臣蔵のTVに釘づけになる。それほど日本人は敵物が好きだ。

爺さんに捕まえられたタヌキが婆さんを騙して殺し，汁にして爺さんに飲ませ，悲しむ爺さんに同情したウサギがタヌキの背中の薪に火をつけて火傷させ，挙げ句の果てに泥舟に乗せて……，童話「カチカチ山」（室町末期）は，日本人なら知らぬ人はいるまい。江戸の田沼意次（おきつぐ）時代，この話の続きが，挿し絵付きの黄表紙に受け継がれ，『親敵討腹鞁（おやのかたきうてやはらつゞみ）』（喜三二作，恋川春町画，1777年）となる。

ここで，いきなりこれを持ち出すのは，日本人の心の深層に待ち伏せによる敵討ちの伝統が脈々と流れていることを証したいばかりでなく，これまでの待ち伏せによる敵討ちの総決算ともいうべきものが戯作的に語られ，戯画的に描かれているからである。

今度は子タヌキがウサギを討って出る番で，いわば「敵討ちの敵討ち」の結構となり，敵討ちの執念深さを示して余りある。果たして如何なる結末になるのか，話のあらましはこうだ――，

〈泥舟に乗って溺死したタヌキの子が成人して，ウサギを討ち取りに出る。月一度の化け物の会合にタヌキ，キツネ，ムジナ，猫又などがカチカチ山に集まるのを機会に，タヌキは，金儲けさせてやるからウサギを撃ってくれと猟師宇津兵衛に頼む。鉄砲撃ちは快諾。

早速，タヌキの案内で，飲めや歌えのどんちゃん騒ぎの会合で猟師は三匹の老キツネを鉄砲でしとめるが，金目の親分の白キツネを撃ち漏らす。タヌキの依頼を立ち聞きしていた日陰山の黒頭のウサギは江戸へ出かけ，浅草観音に我が身の安全を祈ったものの，帰りがけ，尻食らえ観音と言って階段を下りたので観音様は腹を立てその願いをチャラにした。

かの「カチカチ山」の爺さんと婆さんとの間には放蕩息子がいた。勘当され江戸でぶらついたが，心入れ替え，ある屋敷の足軽として仕えていた。芦野軽右衛門と名乗った。この屋敷の若君が疱瘡にかかる前で，それに効く黒頭のウサギの生肝が入用となり，主人が軽右衛門に，それを用立てたら侍にしてやるとけしかけるので，軽右衛門は在所の村で捕まえて献上しますと確約する。ところが，在所に帰って「カチカチ山」の経緯を親父から聞くと，ウサギが親父の大恩人であることを知り，当惑し，目算が狂い江戸に戻る。

猟師につけ狙われている黒頭のウサギはタヌキと猟師にばったり出くわしたので，ウナギ屋に飛び込み助けを求め，ウナギ屋の主人はウナギ船の中に隠し匿った。追って来たタヌキと猟師はウナギ屋に来てウサギを出せと主人の胸元へ刀を突きつけ迫るが，色白の女房が焼く蒲焼きの匂いと流行の唄とにタヌキも猟師も眠気を催し，ウサギの敵討ちはそっちのけになる。

軽右衛門の方は，別のウサギを求めて秋葉権現社に願掛けし，ウナギ屋にさしかかると，タヌキとウナギ屋の主人の争いを耳にして，親父の恩人の黒頭のウサギを庇うため，ウサギを討とうとするタヌキに言い聞かす。

「お前に討たせてもよいところだ，こちらも生肝の欲しいウサギだが，それができないのは，ウサギに義理があると思いたまえ。」

このタヌキと軽右衛門の言い争いをウナギ船に隠れ聞いていた黒頭のウサギは，そこから飛び出し，ウナギ捌きの包丁で切腹する。最期にウサギ曰く，

「軽右衛門様がわれを庇って下さるのも，タヌキ殿がわれを討とうとなさるのも，みな孝の道の義理尽くし。とてもこの場を逃れることができない仕儀となりました。早よう，われの生肝をとって下され。その上でタヌキ殿が思う存分親の敵を取って下され。」

黒頭のウサギは切腹の傷が深くて助かる見込みなく，芦野軽右衛門が主

人に忠義を尽くすため生肝を抜き取り，タヌキは喜び腹鼓を打ち，親の敵これ思い知れとウサギの胴を真二つに切る。

すると，上部は黒い鵜となり，下部は白い鷺となって，飛び立った。ウサギの切腹で，タヌキ曰く，

「一つの命を生肝と敵討ちの二役に使うだけでなく，二つの命に生まれ変わった。割が合ったものじゃない。」

タヌキに頼まれた猟師曰く，

「どうも討ちばえのしねえ敵だ。」

以前，タヌキの案内で，猟師に撃たれた老キツネの小キツネ三匹は，かねてから猟師を討って親の敵を取りたい思いを強くしていた。そこで親分の白キツネはタヌキを味方に抱き込み，もし小キツネどもに猟師を討ち取らせてくれるなら，金比羅神社に祭って，小判をもたんまり上げると持ちかける。タヌキはまんまと騙されて，小キツネどもをあらかじめタヌキ穴に待ち伏せさせておいて，猟師を穴に招き寄せ，タヌキは自分の八畳敷きの金玉を合図に，小キツネどもに敵を討たせると約束する。タヌキはキツ

ネが化かした木の葉をてっきり小判と思い，褒美がもらえると喜び勇む。

タヌキは猟師を騙して穴に連れて来たが，猟師には木の葉は黄金に見えず，猟師は怒ってタヌキと仲間割れする。タヌキはそれが嫌なら，タヌキの八畳敷きの金玉を差し上げると言って，それを猟師の上にかぶせる。すると，一匹の小キツネはタヌキを襲い，他の二匹が刀でタヌキの金玉の上から刺し通し，タヌキも猟師もお陀仏。

さて，夏の日照りで，ドジョウもウナギも品切れのウナギ屋は商売上がったり，金につまった。ウナギ屋の女房が手水鉢を柄杓でつくと，不思議にも，先の鵜と鷺がウナギやドジョウを口から吐いて，女房の商売を助け，ウサギは前世の恩返しをした。

こうして，ウサギが切腹したので，タヌキはウサギの敵を討たずじまいで終わり，軽右衛門だけが，主人に生肝を差し上げたので侍として重用され，重右衛門と改名した。勘当を許してくれた在所の親父を屋敷に引き取って栄え，目出たし目出たし。〉（小学館旧版『黄表紙 川柳 狂歌』pp. 56–67）

タヌキがウサギの敵を取らずに，小キツネがタヌキと猟師を刀剣で刺す話

の結末は，いかにも漫画的である。ここが黄表紙の黄表紙たるところで，親の敵討ちをやつし，茶化す。時代はすでに江戸末期であり，当時，敵討ちは御法度で，現実に起こった事件を題材にすることはできず，鎌倉や南北朝時代に仮託されて歌舞伎や文楽で上演されるか，このような挿し絵入りの黄表紙が版行された。

「親敵討腹鞁」は，日本三大敵討ちの『曾我物語』，「仮名手本忠臣蔵」「伊賀越乗掛合羽」に後続する江戸末期の作であり，敵討ちに対する懐古趣味が映し出されていて，『古事記』から三大敵討ちに及ぶ待ち伏せによる敵討ちの「やつし」的総決算である。親の仇討ち，敵討ちの敵討ち，幼子の復讐心，化かし合い（知略）による変装・偽装・詐取，親孝行，忠義の切腹，武士の義理人情，主君への報恩，鉄砲撃ちの支援，敵の討ちずまい，流行の唄，歌舞伎の和事・荒事と敵役，鳥獣絵巻など，盛り沢山に取り込まれている。一口で言えば「親敵討腹鞁」は，当時大流行の待ち伏せによる敵討ちの風潮を戯画風に取り込んだ大人の漫画本である。これから述べる敵討ちの一般的特徴の大半が出尽くしているだけに，伝来の敵討ちの情念が，日本人の心の深層に通底していることの証である。

『曾我物語』の論題に入る前に，それまでの『古事記』『日本書紀』の古代神話や『今昔物語』『沙石集』の仏教説話や，また『義経記』『太平記』の戦記物に見られる「待ち伏せ」や「仇討ち」の興味深い逸話をなるべく具体的に要約して通覧しておこう。それらは時と場と形を変えて一応『曾我物語』に集約される。その後の江戸時代の敵討ち事件やそれを取材した歌舞伎，浄瑠璃，文楽は，『曾我物語』を源流にして，日本古典芸能として水量を増していくからである。

1）待ち木――

「待ち伏せ」による狩猟法で，『今昔物語』の一話に詳しい。

〈今は昔，鹿や猪を取るのを生業にしている二人の兄弟がいた。二人一緒

に山に入った。そこで，山中で「待ち」ということをした。それは，高い木の股に横木を結びつけ，そこから鹿が木の下を通り過ぎるのを待って射るのである。〉（小学館旧版『今昔物語』(4) 巻第 27-23，pp. 84）

こうした樹上の猟場を「待ち」「待ち木」と言い，「矢田寺縁起絵巻」（室町時代　ワシントン フリーア美術館）にも描かれている。

この猟場に「待ち伏せ」の日本的原型が見てとれる。

奈良時代の「照射（ともし）」という夏の鹿狩りも，木陰に待ち伏せして松明をたき，光った鹿の目を目当てに矢を放つ。こうした猟法は源実朝の詠歌「さ月山おぼつかなきを夕づくよ木隠れてのみ鹿や待らむ」（岩波旧版『金槐和歌集』165）に詠われているように，鎌倉初期まで続く。その後は勢子を使った野山を駆けめぐる巻狩りとなる。日本列島は山岳や谷間，森林や河川が多く，物陰に身を隠し，「待ち伏せ」して獲物を捕るに適している。

また，日本の多雨と夏の日照は，稲作に最適である。その収穫は半年待つしかない。「小山田にとるや早苗のけふよりも稲葉の雲の秋ぞまたるゝ」（岩

波新版『中世和歌集』室町編 p. 70）　稲作の日本民族が，実生活面で「待ち」の習性を培ってきたことは見逃せない。

2）　神代の待ち伏せ――

『古事記』には「待ち攻め」「待ち撃ち」「待ち射返し」「待ち取り」「待ち向かえ」「待ち捕らえ」「待ち受け」といった言葉がよく出て来る。

イザナギノミコトとイザナミノミコトの二柱から生まれた天照大御神と弟スサノヲノミコトの天の岩戸神話によれば，天照大神が岩窟の中に隠れたのは，弟の粗暴な振る舞いによる。そのスサノヲノミコトが高天原から追放され，出雲で八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を毒酒で酔わして退治する。文献に載った本邦最初の待ち伏せであろう。とても人間業ではまともに太刀打ちできない大蛇を退治するには，八つの「毒酒」の壺を用意して，生け贄となる稲田姫を救うしかない。いわば「一人当千」には知略を弄した「待ち伏せ」の戦術が効を奏する。「どつちらも好きで大蛇はしてやられ」の江戸の川柳は，稲田姫も酒も好きなヤマタノオロチがまんまと騙されることをうがっている（岩波旧版『川柳 狂歌集』p. 240）。

神武天皇が九州の日向から東征に向かい大和を平定していくさい，道に迷い，天照大神の瑞夢の告げでヤタカラスを先導役にするとか，宇陀の戦いで，兄ウカシが天皇の出迎えを装って，押機（おし＝圧殺のわな）を宮殿の入り口にしかけ待ち伏せして天皇の殺害を謀るが，弟ウカシの密告によってその難を逃れるとか，天神（あまつか）の夢告げで密告者ウカシを老婆に変装させ，自ら神の憑人（よりまし）になって，ヤソタケルを撃ち破るとかして，大和を平定していく。こうしたやり方には自軍の戦力や知略のみによる勝利でなく，霊夢の功徳とか，敵同士の裏切りとか，動物の支援を当てにするとかの，いわば，自力だけでない一部他力に頼る，受けの特徴が目立つ。

3）　ヤマトタケルの女装――

〈景行天皇に五人の子がいた。内の二人が大碓命（おおうすのみこと），小碓命（おうすのみこと＝後に改名してヤマトタケル）である。天皇は美濃の国に姉妹の美しい乙女がいると聞き，兄の大碓命に連れて来るように命ずるが，兄がその乙女らに求婚し，別の乙女らをその二人と偽って天皇に献上する。天皇は別の女と気づき共寝しない。

天皇は弟の小碓命に，兄の大碓命が最近食事に顔を出さないから丁重に諭しなさいと命ずる。五日たっても出仕しないので，「どうして兄は来ないのか，もしや諭していないのではあるまいか」と疑い，小碓命が「諭しました」と申しあげる。「それではどのように諭したのかと」と聞かれたので，「明け方，兄が廁（かわや）に入ったとき，待ち受けて，つかみつぶして，その手足をもぎ取り，薦（こも）に包んで投げ捨てました」と申しあげた。これを聞いた天皇は，その御子の猛々しい心に恐れをなし，朝廷に背く九州の熊曾建（クマソタケル）の征伐に使わした。

熊曾建は新築の屋敷を軍勢で三重に囲んで，警備を固めていた。新築の祝宴があるとのことで，小碓命はその日を待った。その日になると，結っていた髪をくしけずって額に少女の髪のように垂らし，伯母の衣装を身につけて，すっかり少女の姿になりすまし，女たちの中にまぎれこんでその屋敷の中に忍び入った。熊曾建の兄弟二人は，その乙女姿に見ほれて，自分たちの間に侍らせ酒を注がせた。その宴のたけなわの時，秘めた懐剣を取り出し，熊曾建の衣の衿をつかんで，その胸を刺し通した。平福百穂の「武尊誅梟帥図（タケルノミコト，クマソタケルを誅すの図）」（1893年）がその場面の有様を生々しく描いている（次図参照）。

死に際にクマソタケルは小碓命の猛々しい武勇を讃え，自分の名の「タケル」を譲った。それが故に小碓命は日本武尊（ヤマトタケル）と名を変えた。その後，ヤマトタケルは出雲に出かけ，出雲タケルを水浴びに誘い出し，先に川から上がって，自分の木刀と相手の刀をすり替えて，出雲タケ

ルを殺した。〉（小学館新版『古事記』pp. 217）

以上に見られるように，『古事記』，『日本書紀』の神代に見られる待ち伏せによる勝利は，1）神の託宣，2）毒酒，3）女装，4）敵方同士の裏切り，5）多勢に無勢を特徴としている。こうした「待ち伏せ」はヤマトタケルの「女装」に象徴されるように「女時」の待ち伏せと言える。後の歌舞伎の女形の役どころである。

4）　化け物退治は「待ち伏せ」にしかず――

〈後鳥羽院の頃，女院御所に化け物が出るとのことで，若狭守庄田頼度が呼ばれ，そこへ出かけ，寝殿の天井に六日間真夜中待ち続けていたが，その気配が全くない。女院様にも変わったことは何もなかった。七日目の夜，待ちかねてうとうとしていると，土器（かわらけ）のかけらが頼度の上にパ

ラパラと落ちたので，がばと起き，待ちかまえていると，また振りかけられた，が，目に見える物はなく，しばらくして，頼度の上を黒い物が走り越えたので下からむずと摑み取った。見れば毛の生えていない古タヌキであった。〉（岩波旧版『古今著聞集』602話，p. 463）

こうした化け物退治の説話が，『今昔物語』や『古今著聞集』に見られる。化け物の退治に「待ち伏せ」の戦術が用いられるのは，化け物がいつ出るか分からないからじっと忍耐強く待つしかないからだ。それは受けの待ち伏せの典型である。

5）「待ち伏せ」必ずしも勝てず――

〈源頼光に侮辱を受けた鬼同丸は天井に潜んで復讐しようとするが，「天井にイタチより大きく，テンよりも小さな物音がする」と頼光に怪しまれ復讐を諦める。「明日は鞍馬へ」の声を天井裏で聞いた鬼同丸は鞍馬に出かけ，放牧の牛を殺して，その腹の中に隠れ，頼光・公時・貞光・綱・季武の一行の参詣を先回りして待ち伏せする。ところが頼光一行が牛狩りに興じ，綱が面白がって死んだ牛に矢を放った。鬼同丸は素早くそこから頼光に飛びかかるが，首を打ち落とされた。首は頼光の鞍に食いついた。〉（岩波旧版『古今著聞集』335話，pp. 270）

待ち伏せが必ずしも効を奏さない逸話である。

実戦面では，この逸話に続く「源義家，大江匡房に兵法を学ぶ事」が有名である。大江匡房が義家に教えたことは，「それ軍，野に伏すときは，飛ぶ雁つら（＝列）をやぶる，この野にかならず敵ふしたるべし」であった。武勇に加えて軍略を知るべきとする教訓であり，八幡太郎義家は後三年の役（1087年）で敵の伏兵を雁の乱れを見て知り，清原家衡（いえひら）のたてこもる金沢柵を三方から攻め破った。「後三年合戦絵詞」に描かれている名場面である。源平合戦以前では伏兵（＝野伏（のぶし））も戦術の一つであったが，それも見破られたのである。

6）　義経先回りの待ち伏せで湛海を斬る――

〈義経（牛若丸）が鬼若丸（弁慶）と出会う以前の十七歳，鬼一法眼が天下に有名な兵法の書「六韜（りくとう）」を秘蔵していると聞き，武勇を究めるためその兵法書を借り出そうとする。法眼は尊大傲慢で人を寄せ付けない。法眼の末娘がまだ嫁いでいないと聞き出し，義経はその姫に言い寄り契る。姫は義経の要求を拒みきれず，父の宝蔵から兵書をこっそり盗み出し義経に手渡す。

平家方の法眼は男が娘のところによく姿を現すのに気づき，調べさせると源氏の若者と聞いて怒る。法眼は，妹婿の剛勇な武士湛海を使い，五条の天神で義経を斬るべく頼む。湛海は快く引き受け，先に出かけて待ち伏せして討つと請け負った。

他方，法眼は法眼で，義経を天神に誘き出すために義経と会い，「湛海がおれに敵意を持っているので天神で待ち伏せして湛海を斬ってくれ」と頼む。義経はすぐに天神へ行かずに姫の所へ寄って父の意向を伝えると，姫は昨日父が湛海に何やら不審な事を話していたので，直ちにここから逃げなさいと教える。が，義経は「斬られるものか」と天神に夕暮に出かける。義経の方が先に着き，天神境内前の大木の空洞に隠れ，「いい所だ，ここで待ち伏せして斬ってやろう」と黄金作りの小太刀を抜いて待っているところへ，湛海が五，六人の供を連れてやって来た。

湛海は，天神に向かって「大慈大悲の天神よ，願わくは評判のあの男を湛海の手にかけ討たせて下さい」と祈願した。

義経はこれを見て，すぐ斬りかかろうとしたが，「待てしばし，自分の信奉する天神を大慈大悲と祈願しているが，この義経には悦びの道，あいつにとってはお参りの道だ。まだ礼拝も終わらない信者を斬るのはどうであろうか」と思い，目の前の敵をしずしずと通らせた。その帰りを今や遅しと待つその時間の長さは，義経には，住吉の二葉の松が土に根を下ろし，千年の大木になるのを待つのよりも，遥かに長く感じられた。

湛海は天神に参拝したが人気がないので，社僧に会って，さり気ない様子で「このような様子の若者が参拝に来たか」と尋ねると，「もうとっくにお帰りになりました」との返答。湛海は，「癪な事よ。誰でも早くから来ていれば，のがしはしなかったのに。きっと法眼の家にいるだろう。さあ行って責め立てて引き出し，斬ってやろう」と供に言い，「確かにそれがよい」と七人は連れ立って天神を出た。

義経は，それ来たぞと思って，以前の場所に突っ立って待ち受ける。間近になったとき，湛海の弟子の法師が諫めて言うには，

「女の心は男に靡けば分別もなくしてしまうものです。もしこの事件を小耳にはさみ，男にこうと知らせているなら，このような木陰にでも待ち伏せしていましょう。あたりから目をお放しになさるな。」

対して湛海は「だまれ，この男を呼んでみよう。剛勇なものであればよもや逃げ隠れはしまい。臆病な者ならば，我々の様子を見てはとても出ては来れまい」と息巻いた。義経の方は，「ただ出るよりも，「いるか」という声に応じて，「いる」と答えて出てやろう」と思った。

湛海が「うらぶれた源氏が来ているか」と叫んだので，すぐさまわっと襲いかかり「湛海坊と見るが誤りか。こういう我こそ義経だ」と，太刀を振り首を切り落とした。さらに手下どもの首を斬る。残りは逃げ出した。義経は三つの首を斬って集め，この首を突き刺して，身につけた「六韜」の術で屋敷の塀を飛び越え法眼の前へ。〉（小学館旧版『義経記』pp. 122–129）

この『義経記』の有名な逸話は見られるように，敵する相手は七人，立ち向かうは義経一人，典型的な待ち伏せによる「一人当千」の戦法であり，時間差を逆転させた義経の知略が光る。同じ天神に願掛けした義経が湛海の参拝後に堂々と名乗ってから戦う。ややもすれば「待ち伏せ」が卑怯な戦術とみなされる偏見を退け，後腐れがない筋立てにしている。そこに義経の武士たることの心意気が感じとれる。こうした時間差の待ち伏せは敵討ちに常用される。

以上の逸話は「待ち伏せ」にかかわる逸話であるが，以下は「待ち伏せ」による敵討ちの話である。「待ち伏せ」戦術が親の敵討ちに使われ，『曾我物語』の前身をなす逸話で，いずれも仏教説話集に収録されている。

7）　亡父の敵討ち――

〈上総守（かむつさのかみ）に平兼忠がいた。兼忠は風邪気味で小侍（＝若い侍）に身体を揉ませていた。そこへ兼忠の子息維茂（これもち）が郎党四，五人連れて父の祝賀に来た。その郎党の一人に太郎助という五十歳の荒武者がいた。兼忠はこれを見て，小侍に「あれがお前の父を殺した男だ」と教えた。「父が殺されたことは知っていますが顔が分かりませんでした」と言って涙を流して，その場を去った。

太郎助は酒を飲んで高枕で寝てしまった。郎党どもが周囲を厳しく見張っていた。兼忠は小侍がこともなく退出したと思っていた。ところが，台所へ直行し短刀を研ぎ，懐中にしのばせ，食事を運ぶ人に紛れ込んで太郎助の宿所に潜入した。「祖（おや）ノ敵ヲ罰事（うつこと）ハ天道皆許シ給フ事也」と祈念して，忍び寄り太郎助を刺し殺し，闇に紛れて逃げ出した。

翌日大騒ぎになった。これを聞いた維茂は，犯人が父に仕えている小侍に違いないと考え，父の所へ行って引き渡しを申し出るも，父の兼忠は，たしかにその節は見られるが，しかし，「祖（おや）ノ敵罰（うつ）ヲバ天道許シ給フ事ニハ非ズヤ」と強調して，頑として引き渡さなかった。〉（小学館新版『今昔物語』(3) 巻第 25-4）

この編者は，親の敵討ちは，剛勇の武士といえどもなしがたいことで，かくも厳しい警固を破ってし遂げたことは「天の許しがあったればこそ出来たことだ」と結んでいる。

注目すべきは，親の敵討ちが「天道の許し」として大義名分化されていること，そして私怨の「一人当千」の敵討ちには，夜討ちが最大効果を発揮し

うることである。慈円が『愚管抄』で武士の時代の始まりとした，保元・平治の乱はいずれも夜討ちである。武士の夜討ちはここから始まった。保元の乱で勝利を収めた後白河側の源義朝は「夜打ニスギタル事無」（岩波新版『保元物語』p. 37）と夜討ちの先手必勝を説いた。こうした実戦上の「夜討ち」の戦術は後々の敵討ちの有力手段となる。身を隠す「待ち伏せ」には闇夜は最適である。

8）「幼少の子息父の敵討ちたる事」――

〈武蔵の国の人が九州筑紫に所領があり，そこに下り，三年間帰って来なかったので，その妻に同族の男が忍び通って互いに深い関係になった。この妻には七歳と五歳の子がいた。ところが筑紫から帰るという知らせがあり，忍ぶ男が「帰って来たらお互いに気が晴れない。どうしよう」と，寝物語に語り合った。帰途を狙って，妻の下人を山賊を装わせて殺害することにした。七歳の兄は傍らに寝ていたのでこの密計を盗み聞きし，五歳の弟にこのことをこっそり打ち明け，継父を討つべく決めた。弟はどのようにするのかと聞くので，兄は弟に言う，「昼寝時がチャンスだ，お前が父の刀を継父の胸元に刺し，おれが槌でそれをずしんと打つことにする。」

計らい通りに成功した。子供たちは伯父のところへ行き，事の顚末を話した。伯父はよくやったと褒めたが，隠すことはまずいので，鎌倉の奉行所に連れて行き事情を話すと，奉行は「七歳の子の親の敵討ちは，いまだ聞いた試しがない。武士の子はかくあるべき」と感じ入り涙を流した。子供二人は罪にならず伯父に預けられ，無事帰って来た親のもとで暮らした。〉（岩波旧版『沙石集』巻第9-6，pp. 378）

先の『今昔物語』の逸話と同じく，敵討ちが正当な行為として賞賛され，殺害の罪意識がないこと，幼子の親の敵討ちである点で後の曾我兄弟の敵討ちの原形がここに見られる。

9）ぼろぼろの主君の敵討ち――

『沙石集』の後に著わされた『徒然草』（鎌倉末期）115段には，早，主君の敵討ちのぼろぼろ（＝我執深い世捨ての武士浪人）の小咄が綴られていて，当時，敵討ちが多くなされていたことを窺わせる。

「宿河原というところにて，ぼろぼろ多く集まりて，九品の念仏を申しけるに，外より入り来るぼろぼろの，「もしこの御中に，いろをし房と申すぼろやおはします」と尋ねければ，その中より，「いろをし，ここに候。かくのたまふは，誰」と答ふれば，「しら梵字と申す者なり。おのれが師，なにがしにと申しし人，東国にて，いろをしと申すぼろに殺されけりと承りしかば，その人にあひ奉りて，恨み申さばやと思ひて尋ね申すなり」といふ。」（小学館新版『徒然草』115段）

両人相刺しで共に死ぬ。

10）阿新丸（くまわかまる）の親の敵討ち――

『太平記』は『曾我物語』と同じ時代背景に長いこと語り継がれた南北朝対立の戦記物である。そこには，十三歳の阿新丸（くまわかまる）の親の敵討ちの逸話が語られている。

鎌倉幕府の北条高時が後醍醐天皇を無視する悪道をしたので，1324年，後醍醐天皇は日野中納言資朝（すけとも）らに命じて，北条高時の誅伐（ちゅうばつ）を企てた。しかし事前に発覚し，首謀の資朝は佐渡に流された（正中の変）。これを取材したのが草双紙の「熊若物語」である。

後醍醐天皇は北条高時をなきものにするために資朝らに調伏を命じた。謀反の一味に土岐十郎がいて，妻は六波羅の斎藤太郎左衛門の娘だった。土岐十郎は合戦になれば，自分は討ち死になるかもしれないと妻に寝物語した。妻はそのことを父に密告した。これを聞いた父斎藤太郎左衛門は六波羅に行き事の始終を語り，直ちに鎌倉に伝えられた。十郎は六波羅の討ち手を前に自ら腹を切った。謀反の首謀者，日野中納言資朝は鎌倉に連行されて死罪と

決まり佐渡に流され，佐渡守護本間入道の預り者となった。『太平記』の仇討ちの逸話はここから始まる。

〈日野中納言資朝の子，阿新丸は，十三歳のとき，佐渡に流され八年も牢に繋がれている父に一目会いたいと，供と一緒に京から佐渡に下り，監視役の本間入道と会見した。本間は父子の対面を許さなかった。そうこうするうちに鎌倉から斬首せよとの命が下った。河原で切り落とされた。阿新丸は父の最期を見届けずに，遺骨と父の辞世を受け取り，高野山に納骨すべく京に供を帰し，自らは佐渡に居残った。父子を対面させなかった本間の薄情を恨んだ阿新丸は，寝ている本間親子のどちらかの敵を取ろうと四，五日間，病気を装って昼は床に伏し，夜には本間の寝所をうかがいチャンスを待った。

ある日，風雨が激しく，宿直の家来もぐっすり寝こんでいたので，今夜こそ好機到来と思い，本間の寝所に忍び込むが，相手の運が強く，いつもの寝所を替えていて，どこにいるか行方が分からなかった。別の部屋には本間入道の子息本間三郎が寝ており，これも敵と思って，襲いかかろうとしたが，太刀を持っていなかった。相手の太刀を探し当てて，「寝入りたる者を殺すは死人を殺すも同じなので」，枕を蹴飛ばして起きたところをその太刀でぶすりと突き刺し，竹藪の中に逃げ隠れた。父の敵を討ったので，捕まる前に自刃してもよいと考えたが，倒幕の志を持った父資朝の遺志を継ぐことこそ，南朝の後醍醐天皇への勤めだと思い直して，修験者に助けられながら，京に戻った。〉（小学館新版『太平記』(1) pp. 82–93）

阿新丸（くまわかまる）が，当の本間入道を刺さずに，その子息本間三郎を刺し殺すことで，本間一族に対する敵討ちの筋立てにしている。夜討ちとか，寝所替えとか，寝入った人を起こした上で討つとかは，『曾我物語』にも見られるモチーフである。

「熊若物語」では，「孝行の心を天も感応ましまけん」とし，阿新丸を助けた修験者（山伏）も「我はこれ八幡大菩薩也。汝が孝心を感じ急難を救い

し」と述べ，孝心に重点が置かれている（岩波新版『草双紙集』pp. 50）。対して，『太平記』の語り手は「君（＝帝）の御用にも立ち，親の本意を達したらんこそ，誠に忠臣孝子の儀にてもあるべけん」とし，「忠臣孝子」（＝主君に忠義を示し，親に孝行をする）の大義名分によって，敵討ちを正当化している。先の『沙石集』の幼子の親の敵討ちと異なり，主君の敵討ちを本領とする忠臣蔵への筋道がすでに垣間見られる。後に話題とされる浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」が時代を太平記時代に仮託されていることは，鎌倉時代中期から南北朝時代に入ると武士の敵討ちが，私憤によるそれよりも，公憤によるそれであって，親への孝心よりも主君への忠義の傾向を窺わせるに十分である。

11）『太平記』の「待軍（まちいくさ）」——

南北朝の数々の合戦の模様を物語っている『太平記』には，「待軍」が描かれている。これは相手の出方を待って応戦する待ち伏せの戦術である。山岳の修業僧（野武士＝野伏）を多数集めて天皇方について戦った楠正成は，千早城の攻防で険峻な山岳の地の利を活かし，かつ人形で兵士と見せかけて鎌倉方の大軍と対戦する。こうした「待軍」では，数人が多勢に立ち向かうのでなく，組織的戦闘集団として，大軍と対戦する。後の忠臣蔵事件は四十六士の結束した隠密な猛々しい行動集団である。

保元・平治の乱，源平の合戦以降，「一人当千」の待ち伏せ戦術は実戦では影を潜めるが，しかし，夜討ちによる敵討ちと結びつき江戸時代末までその影を伸ばす。

二節　十七年待って親の敵討ち——『曾我物語』

1193年5月28日，征夷大将軍源頼朝が鎌倉を出て駿河国富士野で武威誇示の大巻狩を催行し，その夜の酒宴も終わり，曾我兄弟十郎と五郎が真夜中に頼朝寵臣の工藤祐経の仮屋形に討ち入り，工藤祐経の首を斬り，父河津三

郎の敵を討ち，積年の本懐を遂げた。十郎は新田四郎に討ち取られ，五郎は捕縛され，翌日斬首。鎌倉幕府が開幕して早々の歴史的事件であった。これより十七年前の 1176 年 10 月，曾我兄弟の父河津三郎が，天城の峠で工藤祐経（すけつね）の刺客によって暗殺された。それが事件の発端である。

初夢は一富士，二鷹，三茄子に倣って，日本三大敵討ちは『曾我物語』が富士，「仮名手本忠臣蔵」が鷹，「伊賀越乗掛合羽」が茄子とされる。それぞれ内容を異にしているが，『曾我物語』は，日本の「待ち伏せ」による敵討ちの古典であり，曾我物の数は他を圧して数が多い。いかに曾我物旋風が後々まで吹きすさんだかが分かる。これまでの情念の「待ち心」が，「待ち伏せ」による復讐的行動へと移る一大転機をなす敵物であり，これこそ文字通り日本を代表する富士山の裾野が舞台となる。

ここでまず，本章に関係する年表と主な著作を掲げておく。

1087　後三年の役，源義家
1156　保元の乱，平清盛・源義朝ら白河院夜討ち，武者の時代の始まり
1159　平治の乱，源義朝，藤原信頼が後白河上皇を襲いクーデター失敗
　『今昔物語』（平安後期）
1176　河津三郎，刺客に暗殺される
1180　源頼朝挙兵
1185　壇ノ浦の戦い，大軍の激突の合戦，平家滅亡
1192　鎌倉幕府開く，頼朝征夷大将軍
　『保元物語』『宇治拾遺物語』『平治物語』（鎌倉前期）
1193　曾我兄弟が富士野の狩場の仮屋形で工藤祐経を討つ，親の敵討ち
1221　承久の乱，鎌倉幕府軍京都を制圧，後鳥羽上皇ら流刑
　『古今著聞集』（1254 年）『沙石集』（1283 年）『徒然草』（1330 年代）
1331　元弘の乱　後醍醐天皇・楠正成，幕府軍と激突，南北朝時代
1341　塩冶判官の讒死（この事件に「仮名手本忠臣蔵」が仮託される）
　『太平記』（1373 年頃成立―― 阿新丸（くまわかまる）の親の敵討ちの逸話）
　『曾我物語』（鎌倉後期から室町前期）『義経記』（室町前期）
　謡曲（「元服曾我」「調伏曾我」「小袖曾我」「禅師曾我」「夜討曾我」）

1467　応仁の乱，地方大名の活躍，信長，秀吉，家康

御伽草子『あきみち』（室町末期から江戸初期），『舞の本』（「元服曾我」「和田酒盛」「小袖曾我」「剣賛嘆」「夜討曾我」「十番切」）

1600　関ヶ原の決戦，天下統一

1630　岡山藩士渡辺数馬の弟源太夫，岡山城下で河合又五郎に殺害される

1634　渡辺数馬が，又五郎を荒木又右衛門の助太刀によって，伊賀の鍵屋の辻で討つ，弟の仇討ち

1683　浄瑠璃「世継曾我」（近松門左衛門）

1687　井原西鶴『武道伝来記』

1701　亀山城内で，石井源蔵・半蔵兄弟が父と兄の敵討ち

浅野内匠頭，松の廊下の刃傷事件

1702　大石内蔵助四十六士が吉良上野介邸討ち入り，主君の敵討ち

浮世草子『元禄曾我物語』（都の錦）

1703　歌舞伎「傾城阿佐間曾我」（中村七三郎）

1710　浄瑠璃「碁盤太平記」（近松門左衛門）

浮世草子『けいせい伝授紙子』（江島其磧）

1718　浄瑠璃「曾我会稽山」（近松門左衛門）

1729　歌舞伎「矢の根」（歌舞伎十八番）

1748　浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」（竹田出雲，三好松洛，並木千柳）

歌舞伎，浄瑠璃，文楽の隆盛

1753　歌舞伎「幼稚子敵討」（並木正三）

1776　歌舞伎「伊賀越乗掛合羽」（奈河亀助）

1777　黄表紙『親敵討腹鞁』（喜三二作，恋川春町画）

1783　浄瑠璃「伊賀越道中双六」（近松半二）

1795　黄表紙『敵討義女英』（楚満人作，歌川豊国画）

1806　草双紙『敵討雑居寝物語』（滝沢馬琴）

1811　読本『催馬楽奇談』（小枝繁）

1847　歌川広重「曾我物語図絵」，歌川国芳の曾我兄弟の図絵

1859　歌舞伎「小袖曾我薊色縫」（河竹黙阿弥）

1900　『武士道』（新渡戸稲造）

1908　『元禄快挙録』（福本日南）

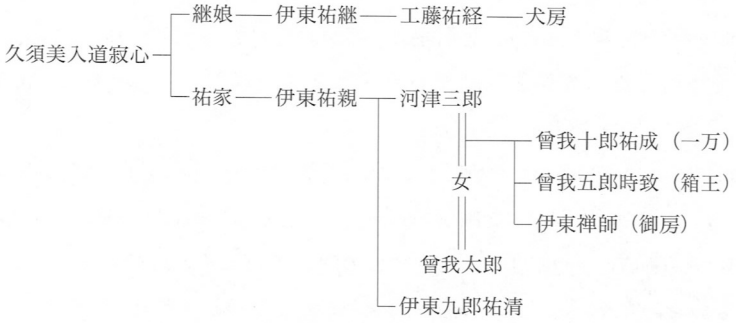
1941　『元禄忠臣蔵』（真山青果）

『曾我物語』の粗筋――

曾我兄弟の祖父伊東祐親（すけちか）は，工藤祐経（すけつね）の父伊東祐継（すけつぎ）と所領の問題で確執があった。

伊東祐親は自分を嫡系とし，伊東祐継を傍系とみなして，所領が傍系に渡っているのをいさぎよしとしなかった。伊東祐親は傍系の伊東祐継をなきものとすべく，箱根権現の別当に調伏を無理矢理頼む。するとその効験あってか，伊東祐継は風邪を引き間もなく死ぬ。その時，子（後の工藤祐経）は九歳だった。父は死に際に，「わが子が十五歳になれば元服させて，この地券を見せてやれ」と妻に地券を託して四十三歳で他界する。伊東祐親はその子の後見役をかって出て，それをよいことに屋敷や土地を横領した。

工藤祐経は二十五歳になったとき地券書を見ると，この八年間，伊東祐親に財産が横領されていたことを知る。工藤祐経は伊東祐親と口論し，奉行所に訴えたが所領は折半という裁決が出た。それに不満を持った工藤祐経は，二人の刺客（大見，八幡）を使って天城の峠の険しい山道で伊東祐親を待ち伏せして暗殺すべく狙うが，討たれたのは嫡子の河津三郎であった。その子息その時，五歳，三歳と幼く，母が兄弟に「十五歳，十三歳になったら，親の敵をうち，私に見せよ」と言うと，兄は「いつか大人になって，父の敵の首を切って人々に見せます」と母の願いに応えた。母は尼になって夫を供養しようとしたが，人の勧めで曾我太郎と再婚した。そのため兄弟は，成人して



兄は曾我十郎，弟は曾我五郎の名が付く。十七年後，兄弟は敵工藤祐経を討ち本懐を遂げる。

ここで親の敵討ちにどのような「待ち伏せ」を用いているのか，『曾我物語』の粗筋を追いながら検討し，後の江戸忠臣蔵との比較のための素材を調えておこう。敵討ちまでの十七年間の成り行きを大雑把に見ると，

I）敵方の工藤祐経が用いた待ち伏せ

II）富士野の巻狩りにおける曾我兄弟の待ち伏せ

とに大別できる。

I）敵方の「待ち伏せ」

1）刺客の待ち伏せ

工藤祐経が二十五歳になったとき地券を見ると，この八，九年間，所領が伊東祐親に横領されていたことを知り，彼を討ち取る決意を固め，刺客二人（大見，八幡）を伊東祐親に向ける。刺客は伊東祐親を七日間夜昼狙うが果たせず，頼朝の狩りの宴の帰りがけ，道を先回りして峠の難所で待ち伏せする（この先回りは義経が用いた時間の逆転）。次々に武将どもが通るのをやり過ごし，五番目に伊東祐親の嫡子河津三郎が馬に乗って来たので刺客が矢を放つと馬からまっ逆さまに落ちる（絵師歌川広重はこの刺客の待ち伏せ場面を，手前に大木三本を大きく描き，得意の垣間見の構図を用いて，峠にやって来る遠方の河津三郎を，木に隠れて上から狙う鮮やかな錦絵に仕上げている）。

本命の伊東祐親よりその嫡子河津三郎が討たれた。河津三郎が「趣意ある人は工藤祐経だ，大見と八幡を見た，わが子を頼む」（岩波旧版『曾我物語』p. 93）と言いながら息を引き取る。

その時，河津三郎には子が三人いた。五歳の一万（後に元服して十郎祐成＝すけなり），三歳の箱王（後に元服して五郎時致＝ときむね），五十日後に生まれる御房（後に伊東禅師）。母は幼い兄弟に「胎の内の子だにも，母のいふ事をばきゝしるものを，ましてなんぢら，五や三つになるぞかし。十五，十三にならば，

親の敵をうち，わらはに見せよ」（前掲『曾我物語』p. 94）と言い聞かす。一万の元服が十年後であることに注目しておこう。実際に本懐を遂げたのはさらに二年後の十郎二十三歳と五郎二十歳のとき，十七年後となる。

2）河津三郎の父伊東祐親は悔しく，すぐさま出家して入道になると同時に，次男の伊東九郎祐清（すけきよ）に，刺客の「大見，八幡の首を取って見せよ」と命ずる。九郎は多勢を連れて刺客の八幡を襲うと，八幡は「主のために命すてるも惜しくない」と切腹し，主君に対する忠義を尽くす。逃げる大見も討ち取られる。刺客を討つことは父入道と母と兄への忠孝を尽くすに等しい。この段階で早，一族に対する伊東九郎祐清の武士としての意気地が示される。また注目すべきは，刺客八幡の切腹は主君のためとする点である。後の忠臣蔵事件では武士の主君のための切腹が美化されるが，その走りとも見られる武士の忠義心。

3）物語筋の先取りになるが，五郎は兄と二人で，源頼朝に寵愛された工藤祐経の首にとどめを刺した後，兄弟は，名乗って次々と襲い来る武士どもを斬るが，兄は新田四郎に斬られる。五郎は頼朝に謀反して斬られた祖父祐親の意趣を晴らすため，源頼朝の御所に斬り込もうとするが，頼朝の家来の，物陰に隠れている「今や遅しとあい待つ」女装する五郎丸に抱きすくめられ縛られて，頼朝の前に引き出され，敵討ちの意趣を問われる。（女装はヤマトタケルが始めた待ち伏せ戦術である。）十七年も待って，絶好のチャンスを窺い，親の敵を取った勇猛な曾我五郎が，最後に，こともあろうに女装の五郎丸に捕縛されるのは皮肉である（謡曲「夜討曾我」岩波新版『謡曲百番』p. 287）。これをうがった江戸中期の川柳に，「よいじぶん　女に見えた五郎丸」（小学館旧版『黄表紙 川柳 狂歌』p. 276）がある。

見られるように「待ち伏せ」とは，多勢の敵から身を隠し，討つ好機の到来を待つことであり，そのために偽装の手を用いる。曾我兄弟の敵方も刺客や女装による待ち伏せ戦術を用いている。

II） 曾我兄弟の「待ち伏せ」

1） 兄一万九歳，弟箱王七歳の時の約束

死んだ父の面影が恋しく，悔しさが募る兄弟は，まだ元服を迎えていないとき，親の敵討ちを堅く約束する。丁度中秋の名月に連れ飛ぶ五羽の雁を見て，兄が弟に向かって「一つは父，一つは母，三つは子共にてぞ有らん。わ殿は弟，われは兄，母はまことの母なれども，曾我殿，まことの父ならで，こひしとおもふその人の，ゆくゑも敵のわざぞかし。あわれや」「いつかは，われら十五・十三に也，父の敵にゆきあひ，かやうに心のまゝに射とをさん」と兄は障子に矢を放つが，猛々しい弟の箱王は，「大事の敵，弓にては，とおくおぼえたるに，かやうに首をきらん」（前掲『曾我物語』pp. 133）と障子の紙を引き裂き高々と差し上げ木太刀でばさりと切り，将来元服したときの武士の気概のほどを示す。しかし，兄には弟の元服までの月日の経つのが遅く感じられた。こうした兄弟の固い誓いのために敵討ちが先延ばしになる。

母は子供たちの復讐を堅く制した。それは1180年源頼朝が反平家の挙兵によって関東一円に勢力を伸ばしていたとき，祖父の伊東入道祐親が平家方についていて，斬られたからである。そのため，母は頼朝の寵臣である工藤祐経の敵討ちのごとき悪事はできないと子供を諭した。頼朝挙兵のとき，畠山重忠（しげただ）が平家方についていたことが，兄弟の助け船となる。

兄弟がそれぞれ十一歳，九歳になったとき，頼朝方の梶原景季（かげすえ）が平家方の子孫根絶のために，兄弟の首を召し取りに来る。仕方なく継父の曾我太郎は二人を鎌倉へ連れていく。由比ヶ浜に兄弟を連れ出し，斬首しようとすると，まず，あまりの哀れさに和田義盛が頼朝に斬首を取りやめることを願い出る。それが叶えられず，最後に畠山重忠が君主の憐憫と慈悲の教えを説き，成人するまで私に預けて下さいと懇願し，辛うじて兄弟は斬首寸前で救われる。畠山重忠は兄弟の恩人であり，後に，仮屋形討ち入りの際には今夜がチャンスであると和歌で教えている。

一万は十三歳になり元服して，曾我十郎祐成と名乗った。母は十一歳の箱

王に箱根に登って法師になり，亡父の供養をせよと諭したが，箱王は十三歳になると母の意趣に背き「願はくは，父の敵をうたしめたまへ」と箱根権現に昼夜祈願する。

2） 箱王（十三歳）待ち伏して工藤祐経を狙う

箱王は，正月十五日頼朝の箱根権現参詣の噂を耳にした。「その日をまちし心のうち，たゞ千年をおくるばかりなり」（同書 p. 163）の千載一遇のチャンスとみて，きらびやかな武士どもの参詣行列の中に工藤祐経の顔を教えてもらい記憶に留める。箱王は守り刀を脇に差し隠して工藤祐経を狙うが，逆に，かねて伊東の孫がここにいると聞く工藤祐経は，河津三郎に似た稚児をそれと知り，自分の方から招き，「いそぎ法師になり，別当につぎたまへ」と昔を懐かしんで語りかけ，引き出物として刀一腰を授け与える。これをチャンスに箱王は刺そうと思うが，大男の祐経は目を離さず刀に手を置いていたので思いとどまる。その夜，「暁におよぶまで，心をつくしねらへども，すこしの隙（ひま）なければ，いたづらに夜をあかす」（同上 p. 169）有様で思いを果たせない。これが一回目の待ち伏せである。

3） 箱王十七歳の時，法師にすべく預かった別当は出家させようとするが，箱王の方は，本意を遂げないと必ず後悔するとの思いが強く，箱根を脱出し曾我に下って，源氏の鎌倉殿でも平家の小松殿でもない，北条時政を烏帽子親に元服して曾我五郎時致（ときむね）と名乗り，十郎はそれを祝して舞を舞った（岩波新版『舞の本』「元服曾我」p. 473）。母は出家しない五郎を親不孝者として勘当する。この勘当は三年間解かれず，五郎二十歳の討ち入り直前までつづく。

十郎は異母兄弟の京の小二郎に手助けを求めるのに対して，五郎は不承諾の場合にまずいことになるとためらう。十郎は親の敵討ちを小二郎に打ち明けて頼むが，上意に背けないと断られる。兄弟の心の内を外に漏らした失策である。十郎が母に敵討ちを打ち明けると，源氏の世だからもってのほか，妻を娶れと叱りつけられた。

工藤祐経が伊豆より鎌倉に向かうことを知り，五郎が兄に，さあ追いついて一矢射ようと勇み立つが，相手は五十騎，こちら二騎では太刀打ちできないのでやり過ごす。二回目の待ち伏せ。

4） 五郎は頼朝の浅間狩りを耳にし，十郎と馬に乗って一行に付き纏い，何回か狩場や旅宿でチャンスを窺うが，厳重な警備で果たせない。工藤祐経の仮屋形に忍び込んだものの，折り悪しく客がいて，家来多数が厳重に警戒しておりチャンスがつかめない。ただ畠山重忠のみが，兄弟の心中のほどを察して後楯になろうと言うが，討ち果たす機会がない。三回目の待ち伏せ。

討ち取るには昼の狩場と仮屋形の夜討ちの二つの場合が想定される。兄十郎の考えでは，昼の狩場では何千もの武士が狩場にいて，敵が見分けにくく狙いが定めがたい，対して，「夜になれば，隠れること簡単」（前掲『曾我物語』pp. 202）で，仮屋形に忍び込み，夜討ちがよいとする。いずれにせよ，敵討ちのチャンスは頼朝の隙の多い狩場の時にしか巡って来ない。

5） 那須の狩場では頼朝の武将とその配下が十万人と集まり，曾我兄弟は勢子の者どもに紛れ込むが，大勢の中に工藤祐経の姿を一目見ただけでその日は空しく終わった。四回目の待ち伏せ。

6） 富士野の狩場，最後のチャンス――

頼朝は富士野で大々的な狩の催しを初夏にすることになった。それを耳にした兄弟は，地元に近いのでこれが最後のチャンスと見た。五郎は兄に向かって堅い決意を誓う――

「今まで本意をばとげざれ。今度にをゐては，一筋におもひきり，便宜よくは，御前をもをそるべからず，御屋形をもはゞかるべからず，夜ともいはず，昼ともきらはず，とをくいおとし，ちかくはくみて，勝負せん。身をあるものにせばこそ，隙（ひま）をもうかゞい，所をもきらはめ。もしし損ずるものならば，悪霊・死霊となりて，命をうばふべし。」（同上 p. 212）

二人は異父兄弟の三浦与一を味方に付けようと話を持ちかけ断わられ，先の異母兄弟小二郎に助力を求めたのと同じ失策をしでかす。

敵討ちで二度と帰らぬ人となるので妻を娶らず，十郎は大磯の遊君虎，五郎も化粧坂の遊君に通う。十郎が虎の茶屋に最後の暇乞いに出かけると和田義盛が遊興に来ていて，十郎に惚れ込んだ虎が座に出渋り，最初の盃を十郎に注ぎ，和田義盛と諍う。五郎が虫の知らせで駆けつけ，その急場を救う一場がある（同上 pp. 255，前掲『舞の本』「和田酒盛」）。ともあれ，江戸の遊廓の情景が鎌倉時代に重ねられている。

曾我兄弟は命なき覚悟で，夏の庭の千種にも別れを告げ，母のところへもその旨を伝えに出向く。母は今回の富士野の狩場に行くことを制止するが，十郎は母に強くねだって小袖の形見を貰う。五郎はなかなか母の勘当を許して貰えず，十郎が親不孝者の五郎を斬る真似をしてやっと三年間の勘当が解かれる。兄弟は三年前から二人で親の敵を討つ約束を交わしていたからだ。その後兄弟は常に行動を共にし，工藤祐経の首を父の聖霊に捧ぐべく決意する。十郎二十二歳，五郎二十歳。

曾我兄弟は母に別れを告げ，箱根の峠を通って富士の狩場に赴く途次，五郎が十一歳より法師になるべく世話になった別当に会い，別当も兄弟の心中を察し，門出を祝い，それぞれに秘蔵の伝来の銘刀の一腰を授ける。早速，頼朝が富士野の狩場に行く途中，浮島原に旅宿する工藤祐経を夜討ちに出かけるが，警護厳しく手が出ない。

チャンス (1) ——狩 場

頼朝は，畠山重忠，和田義盛，梶原景季，朝比奈義秀らのあまたの武将とその配下を引き連れて，富士野で大々的な狩りを催した。大勢が色々と鹿を夢中に射止めるなかで，「兄弟は，見えがくれにつれつはなれつ，心をつくしねらひける」（前掲『曾我物語』p. 319）とき，五郎は遥か遠くに，馬にまたがり鹿を射止める工藤祐経を見つけ十郎に告げると，遠くの祐経を恨みの矢で狙いすまし，五郎も弓を引こうとする，そのときもとき，十郎の馬が運悪く伏木に引っかかって落馬してしまい果たせずに終わる。その日が暮れたとき，かねてから兄弟がつけ狙っていることを知っていた畠山重忠が，明日は

雨になるので鎌倉殿（頼朝）は鎌倉に帰るため，今宵しかチャンスがないことを和歌にして知らせる。

まだしきに色づく山の紅葉かなこの夕暮をまちて見よかし（同上 p. 322）

頼朝方の梶原はこの歌に不審を抱いたが，十郎は敵討ちの機会は今宵しかないと解釈した。

チャンス (2) ——祝 宴

狩りの祝宴が夜開かれた。十郎は数ある仮屋形をめぐり歩き，祐経のそれを探し当てた。すると工藤祐経の子息犬房が，今この前を十郎が通ったと言うので，屋形の中で遊女と酒宴を張っていた祐経と王藤内は初対面の十郎をその宴席に招いた。祐経は十郎を前にして，

〈祐経を夢にも敵と思うな，河津三郎が討たれたのは自分の所為ではない。人の讒言により自分が討った事にされているが，思えば甥であり，これからは自分を親とも思って欲しい〉

とうそぶき，盃を飲み交わし，十郎に舞を舞わさせた。十郎は目前の祐経を討とうと思えばできたが，弟五郎と一緒に討つ約束をしていたので，自分一人でするはやる心を「待てしばし」と抑えた。十郎の帰りを待っていた五郎はいきさつを聞き，「是や，宝の山に入て，手をむなしくする風情なり。うれしくも，御こらへ候ものかな」（同上 p. 332）と，兄の待つ忍耐心を讃えた。

チャンス (3) ——「夜討ち」

夜の更けるのを待つ。兄弟が和田義盛の仮屋形に行くと，義盛は，「し損じなば，一家の恥辱なるべし。後楯にはなり申べし。頼しく思ひ給へ」（同上 p. 334）と励ます。兄弟は夜の更けるのが待ち遠しく，曾我へ手紙をしたため，母への形見を従者（鬼王，道三郎）に託し，すがる従者を無理矢理曾我に帰す。兄弟は夜中に，厳重な警戒を敷く数々の仮屋形の前を次々と，出放題の嘘をついて巧みに通り抜ける。工藤祐経の屋形に入るが，用心深い部下の王藤内の忠告に従って屋形を替えていて，盃が転がるもぬけの殻。

曾我兄弟に好意を抱いていた畠山重忠の家来が夜回りの番で，祐経が遊女と一緒に臥している屋形を，扇で秘かに教える（同上 p. 349）。酒宴で遊女と酔い臥した祐経と王藤内を松明の明かりで目の当たりに見た十郎は弟五郎に，お前は王藤内を斬れ，祐経はおれにまかせよと言うと，五郎は，

〈王藤内はどうでもよい，斬るべきは祐経だ，めった切りに斬ろう。これまで待ちに待った機会だ，三千年に一度咲く優曇華か，三千年に一度実をつける仙桃に巡り会った機会だ，拝んで二人して斬らねば〉

と兄十郎に言葉を返す。

五郎が斬ろうと太刀を振り上げるとき，十郎はとっさに言う，

〈待てしばし，寝入った者を斬るは，死人を斬るもおなじだ。起こせ〉

と，太刀の先を祐経の胸にあて，

〈どうだ，左衛門殿（＝祐経），昼拝見した曾我の者どもだ。われらほどの敵を持ちながら，気を許して寝ているとは。起きたまえ，左衛門殿〉

と，声をかけ，祐経が起きて刀に手を触れたとき，ばっさりと二人一緒に三回斬り込み，五郎が喉にとどめを刺して積年の怨念を晴らし，本懐を遂げた。逃げる王藤内も兄弟に四つ切りに斬られた。五郎の刀は，祐経が引き出物に与えたそれであった。（この場面の広重の錦絵は，まず十郎が右から斬り，五郎が左から首を斬り落とす二段構えの構図で描いている。「祐経は二度目の疵が深手也」（岩波旧版『川柳 狂歌集』p. 85）の川柳は勇猛な五郎のこの二の太刀をうがったもの。）

十郎と五郎は敵を討ったことを名乗り出て，敵側を五十人ほど斬り殺すが（前掲『舞の本』「十番切」），最後に新田四郎に斬られる。十郎の最期の言葉は，

「五郎は，いづくにあるぞや。祐成（自分＝十郎），すでに新田が手にかゝり，むなしくなるぞ。時致（＝五郎）は，いまだ手おひたる共聞ゑず，いかにもして，君（＝頼朝）の御前に参，幼少よりの事ども，一〳〵に申ひらきて死候へ。死出の山にてまち申べきぞ。おひつき給へ。南無阿弥陀仏」（前掲『曾我物語』p. 361）であった。

五郎は女装の五郎丸に不運にも捕縛されて，翌日頼朝の前に引き出され，工藤祐経の嫡子犬房（九歳）が仕返しと扇で五郎の顔を打つが，頼朝は止め，五郎に「頼朝を敵と思うか」と聞く。五郎は，

〈そうだ，祖父伊東入道の謀反によりわれら長いこと奉公が絶えたばかりか，子孫の敵ではあるまいか。閻魔王の前で「日本の将軍鎌倉殿を手にかけた」と申せば，罪の一等を許されるはずと前から狙っていたのだ〉（同上 pp. 369）

と答え，五郎はひるまない勇者振りを示した。頼朝は敵味方の意趣ある狼藉を断つために斬首を命じた。また頼朝は頼朝で兄弟の追善のために曾我の土地二百余町を下賜するという権力者としての恩人振りを見せた。

『曾我物語』の討ち入り後の後日譚——

後日譚は曾我家にかかわった残された人物の行方の語りになる。

兄弟の従者鬼王と道三郎は形見を曾我の母に届ける途中，ある使い人から兄弟が祐経の敵を討ったことを知り，その事情を母に伝え，兄弟の形見を渡してから高野山に遁世し，兄弟の後世を弔った。母は，五郎の勘当で長いこと会わなかったことを悔やみ泣き，先立った子供たちの追善を箱根の別当にしてもらう。

十八歳になる末弟の禅師は出家の身であるが，頼朝に召し取られると聞き，切腹する。そこを取り押さえられ，頼朝の前に引き出され，「兄弟の意趣に同意し，頼朝を一太刀撃ちたい」と，はばからず言ったため，兄に劣らず意趣あると者として斬られた。

兄弟に支援を求められ断った京の小二郎は，頼朝への謀反に与して傷を受け死亡し，他方，同じく支援を断った三浦与一は出家した。

十郎の遊女虎は十郎の死を逆縁にして，墨染め姿になり曾我の母のところに出向き，ともども十郎の面影に泣き伏した。さらに虎は懐旧の念に駆られ，討ち入りした仮屋形の荒れ果てた跡に行き，「過去幽霊，成仏得脱」と

回向して十郎の霊を鎮め，五郎の遊女手越しの少将の所へ足を運ぶ。少将は虎の尼姿に驚き，出家の意を固め，二人は信州の善光寺で一，二年修業して，後に法然法師と会い，念仏の法門に入り尼となる。虎は大磯の山奥に庵を結び，少将ともども念仏を唱える勤行の日々をおくる。

母は七年忌を追善し，二宮の姉（曾我兄弟の異父の姉）とともにその庵を訪れた。三十歳にもならぬ虎は老女のように痩せ，庵室には阿弥陀三尊が掛かり，机上には浄土三部経，仏前に兄弟の位牌が安置され，花香が供えられていた。虎も少将も，浄土宗の教えを母に説教するまでの信心深い尼になっていた。六十歳の母は二人の尼に従って「南無阿弥陀仏」と称名念仏し往生を遂げる。二人の尼も正念臨終に当たって，念仏百遍唱えて阿弥陀の来迎を待ち，往生の素懐を遂げた。

昔の富士の裾野の狩場は廃墟となり，兄弟の執心の亡霊が出没したため，北野天満宮や将門神社を建立して菅原道真や平将門の霊を鎮めたように，曾我八幡宮が建立され，敵を討とうと思う者はこの神社に参詣祈願した，と後日譚は最後を結んでいる。

以上，見られるように，『曾我物語』では『古事記』から『太平記』までに取られた「待ち伏せ」戦術による敵討ちのさまざまな様式が集約されている。幼子の復讐心，女装，夜討ち，知略，一人当千，武士の意気地，チャンス到来の気長な待ち伏せなどである。

「待ち伏せ」を敵から身を隠す偽装した戦法と解すれば，『曾我物語』では，敵を討つまでの期間全体，十七年間の長きにわたろう。それには長年の忍耐心と弛まぬ強い復讐心が求められ，そこに武士の仁義と義侠心が示されて，執念・宿念が行動に移される。

『曾我物語』の舞台は情念の「待ち心」の能舞台や，死霊が漂う墓場ではなく，征夷大将軍の頼朝が武威を誇示する大々的な巻狩りを挙行した富士野が舞台となる。そこでの殺傷の武器は調伏や生き霊の言霊（ことだま）や身を

離れた怨霊の魂（たま）でなく，武士のシンボルとしての刀剣である（前掲『舞の本』「剣讃嘆」）。その心持ちは武士の意気地，義理人情，義侠心である。

ところが，『曾我物語』の後日譚は法然の浄土宗一色に塗り込められている。その成立が鎌倉後期から室町前期とされたため，鎌倉仏教，特に浄土教の普及・隆盛と軌を一にしているためである。

殺人，殺傷は仏教の殺生の罪に当たり，仏教の教えと両立しないはずである。『曾我物語』の語り手は十郎と五郎は極楽浄土に往生できるとして，「誠に弥陀の誓願は，十悪五逆の大罪をも，一念十念の力をもつて，来迎引接したまふべき他力の本願，たのもしかりけり。此人々は，父のために身をすてける心ざしなれば，罪にして，しかも罪にあらず，その上，在世の時も，仁義をみださざりしかば，後の世までも，悪道には堕罪せられじと，たのもしくおぼえける。」（前掲『曾我物語』pp. 382）と説く。つまり，武士道の仁義の大義名分は阿弥陀如来の他力本願による極楽往生と矛盾せず，討ち手は地獄に堕ちないとされる。「罪にして，しかも罪にあらず」の敵討ち至上の価値観である。

また，兄弟が父親の敵を取っても，討ち手が斬首されたり切腹したりすることは母親に先立つ親不孝であり，儒教的倫理観に反する。にもかかわらず，謡曲「小袖曾我」では母が五郎の勘当を許し，兄弟は母と祝言の盃を交わし，最後に地謡が「終（つい）には其名を，留めなば兄弟，親孝行の，例（ためし）にならん，嬉しさよ。」（岩波新版『謡曲百番』p. 80）と謡い，敵討ちの仕業も親孝行に美化される。この点も注目すべきである。

すでに『曾我物語』で武士道の敵討ちの美化作用が進んでいて，後に井原西鶴の『武道伝来記』でさらに美化昇華され，またさらに，江戸時代敵討ちは御法度であったにもかかわらず場合によっては公的に許され，数々の事件を引き起こし，武士の仁義，義理の武士道へと進行して，一世を風靡する。それは仏教，儒教の教えから離れ，日本武士道の価値の至上化に道を開き，懐旧的にも美化されて，先の年表に見られるように曾我物が江戸末までさま

ざまなスタイルで語られる。しかし，現今では忠臣蔵に押され，曾我物が舞台にかかることはほとんどない。

『曾我物語』はまだ物語性の筋が強いが，その謡曲や『舞の本』では早，その筋が細り出す。いわば，詞書があり，物語筋が流れる長い絵巻物をハサミで切って一段一段，一場一場を掛け軸にしたり額に収めたりして，名場面の特化や劇化が始まる。「元服曾我」「調伏曾我」「和田酒盛」「小袖曾我」「剣賛嘆」「夜討曾我」「十番切」として，謡曲や『舞の本』で謡われたり，語られたりする。

こうした各名場面の個別化，特化自立の傾向は江戸時代になると急速に進む。近松門左衛門の浄瑠璃「世継曾我」（1683年）がそれであり，今度は五郎丸（＝藤太重宗）を討つという「敵討ちの敵討ち」の筋書きにした後日譚である。

「世継」とは，十郎と虎との間に形見の祐若（三歳）が隠し子としていたことによる。富士の巻狩りで各部下の獲物の種類と数を記帳する新開荒四郎に，五郎丸は五郎の生け捕りを獲物だと書かせた。それを怒った朝比奈三郎は鬼王と道三郎に五郎丸と新開荒四郎を討てとけしかける。鶴岡八幡宮にて，付け狙われている五郎丸がその祐若を人質に鬼王，道三郎を誘き出して斬るとの知略。虎は虎で我が子を救ってくれればわが身はあなたの言うままになると色めかしく言い，少将は少将で唐櫃に隠れて待ち伏せして酒に酔った鬼王と道三郎を打ちなさいと誑かす。新開荒四郎と五郎丸はまんまと騙され，そこへ騙し討ちできると隠れ，蓋が閉められる。そこへ来た朝比奈は虎に事情を聞いて大きな重い石を唐櫃の上に載せる。五郎丸はそれを破って出ようとして重い石で圧死し，新開荒四郎は生け捕りにされ鎌倉中の笑い者にされる。虎と少将は殺したとて，曾我兄弟は帰らぬ身なので，出家させたいと頼朝に懇願する。頼朝は若宮に所領を下賜し，その名を曾我十五郎祐時（十郎と五郎の合成名）と名乗らせた。最後を近松は「富貴の家と成りけりげにありがたき忠孝の。威徳は千秋万万歳でめでたきかりともなかなか申ばかり

はなかりけり」（岩波新版『近松浄瑠璃集』上 「世継曾我」p. 46）と結んで「忠孝」（忠義と孝行）に重点を置いている。『曾我物語』には語られていない後日譚である。鬼王も道三郎も，敵を取らずじまいで終わっている点は冒頭に掲げた「親敵討腹鞁」と同趣である。

歌舞伎集では，「傾城阿佐間曾我」（1703 年）や「矢の根」（1729 年）がそれで，前者では大磯の揚屋が舞台となる。犬房が少将を初買いしたり，貧苦の十郎の虎との遊びのために鬼王が道三郎（＝団三郎）と相談して刀を売って作った金二十両を鬼王の娘おさんに預ける。鬼王と同宿の，新開荒四郎（＝軍太左衛門）がおさんを殺害してその金を奪う。おさんの母親（八重垣）が責任をとって大磯の揚屋で「大しう」の名で我が身を売る。その大しうが，客が請け出すとのことで，十郎に濡れ掛かり夫鬼王に義理尽くしの，指切して心中を誓うといった偽装。他方，曾我家を絶やさぬために曾我兄弟の禅師法師は還俗して二宮の姉と縁組みさせる偽装，鬼王は母が五郎の勘当を許すための仕掛けをつくる……，といった戯作風の和事の所作事に脚色され，討ち入りの場面の荒事は背景に退く（岩波新版『江戸歌舞伎集』pp. 37–73）。「矢の根」では五郎が大根運びの馬を奪い大根の鞭を当て，和田の酒盛りの急場に駆け込むそれだけの荒事場面が新たに創作される（岩波旧版『歌舞伎十八番集』pp. 52–57）。いずれも『曾我物語』には語られていない場面である。

この三例でも分かるようにすでに『曾我物語』の粗筋の周知が前提される。それほどまでに『曾我物語』は一般大衆の人気をさらっていた。人気を呼ぶ込むために逆に「曾我」と銘打つものも出て来る始末となる。河竹黙阿弥の「小袖曾我薊色縫（あざみのいろぬい）」（1859 年）がそれであり，敵討ちも江戸時代の遊廓を背景にした新作であるが，曾我兄弟と刺客（近江＝大見，八幡），犬坊丸（＝犬房）を登場させ，『曾我物語』の筋をアレンジしてサービスの一場面を「第壱番目大詰」に設けているほどである（岩波旧版『歌舞伎脚本集』下 pp. 402–407）。

粗筋の周知が前提されると，単独の見せ場の所作事が目立ち，待ち伏せに

よる敵討ちのストーリーの糸が細り目立たなくなる。こうも言ってよければ首飾りの大小の玉石が一つ一つ綺麗に磨かれ，それを通す糸の方が細く目につかなくなると同じである。そうすると，敵討ちの場面が薄れたり，待ち伏せの場面が背景に退き，全体の物語性が失われ一場一場の見せ場の演技にこだわり，演ずる役者の腕前が評価の対象となる。よって，人気役者評判記がもてはやされるように変わっていく。江戸歌舞伎の脚本に人気役者名が載るのはその表れである。人気役者が色々な所作事をして脚色し改編するのである。

この特化する脚色傾向は後の忠臣蔵事件をあつかった浄瑠璃，歌舞伎，文楽においてさらに強められ，ややもすると待ち伏せはおろか，敵討ちの物語筋すら見えにくくなってしまう出し物が多くなる。しかし，元禄時代の忠臣蔵事件といい，四十七年後の浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」といい，「待ち伏せ」が時代を経てその品や様を変えているだけで，待ち伏せによる敵討ちの範疇を抜け出るものではない。この点を「男時」の待ち伏せで検討したい。

『曾我物語』に語られている親の敵討ちは，これまでの怨霊的情念の「待ち心」を，中世武士の現実的行動に移す一大転機をなし，「女時」の受けの待ち伏せから，江戸時代の猛々しい集団的な武士浪人の「男時」の待ち伏せへの機縁となる。

（つづく）